

美術教育における鑑賞教育の位置づけ 1

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 向坂, 一彌, 平野, るり メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/329

美術教育における 鑑賞教育の位置づけ(Ⅰ)

図画工作科における鑑賞活動の在り方(実践編)

向坂 一彌・平野 るり*

Rank of Appreciative Education of Evaluation —The Way of Appreciative Activities in Education through Art— (For Practice)

Kazuhiro KOHZAKA and Ruri HIRANO

はじめに

一なぜ、今、鑑賞教育を重視するのか一

これまでの美術教育における鑑賞の活動は、どうしても知識的、説明的な指導に偏りがちであった。その反省から、昭和52年学習指導要領の改定により、個別の領域的扱い、表現に付随して行なうことが原則となった。これは、児童にとっても親しみやすく、分かりやすいものにしていこうとする配慮からである。しかし、教育現場ではこの趣旨が徹底せず、表現の活動にさきがけて作例で示したり、表現製作の結果の反省材料とする程度にとどまって、「身近であること」が反面で児童の間での優れた作品をお手本と示すことになったりもした。さらに作品の見方や味わい方が他の人との善し悪しの比較の評価になってしまうなどの実態が生じ、それぞれの個性がにじみ出ている作品の良さや美しさを、共鳴しながら深く味わうという本来の鑑賞活動が適切に行なわれなくなってきた。

望ましい鑑賞教育を考えるためには、大前提である教育の在り方の観点から考察をしていく必要がある。それについて、金沢大学教育学部紀要「小学校教育における造形活動の必要性と位置づけ*1)」で詳しく述べたが、いかに教える

かという前に、何を育てようとしているのかが重要な観点である。小学校教育ではどの教科も“楽しむ”好きにすることが第一歩であって、それが成功すれば“好きこそもの上手”となるからである。

歴史的な教育の流れからも、1960年代は教育内容に、70年代は教材研究に、80年代は教授行為に授業研究の焦点がおかれ、この変化にともなって教師は学習者をより多く意識するようになってきた。特に昭和48年に数教協が「楽しい授業の創造」をスローガンにして、ゲームを積極的に導入した数学教育を展開していった点には着目したい。「楽しくなかったけれど、よくわかった」という学習観を一度根底から否定し、つまり、学習の「楽しさ」という観点から、従来の「わかる」という意味内容を問い直し、さらにはこの観点から教育の内容と方法を開発すべきであると主張したわけである。

図画工作科においても、そのような意味から昭和52年以来造形遊びに象徴される遊び内容、学校外教育への関心等、あわただしい変化がみられる。指導要領では昭和52年から学習内容が表現と鑑賞の二領域に整理され、鑑賞のウェイトが強調されたかに思われがちだが、これは従来の絵画、彫塑、デザイン、工芸の四領域を表現としてくくっただけで、表現活動における鑑

賞の位置を明確にしたわけではなかった。また、鑑賞に対して教師自身も積極的ではなかった。

これまで美術教育は、表現活動の方が子どもの発達の様子や教育の効果が明白であって、鑑賞の方は、それが明白につかめないと思われていたのではなからうか。

現代は、ビデオや印刷物をはじめとした様々なメディアが発達している。子ども達の生活情報もこれらを通して伝えられ、彼らは情報を収集し、つなぎあわせることで行動範囲を広げようとしている。従ってこの時代状況を踏まえて、美術教育も変容していく必要がある。それは、従来あまり重視されなかった鑑賞教育を問い直していかなければならない。

しかし、私達教師が、ここで特に留意しなければならない点は、昭和52年以前の鑑賞教育に逆戻りして、知識、説明的な指導に陥らないために、充分注意しなければならない。

即ち、真の意味で、深く美術を愛する心や態度を育てることである。そして一人ひとりにしっかりとした審美眼を育てる教育への転換が求められているのである。

「見る」とことと「視る」ことは同じではない。私達は、見ることは簡単にできるが、視ることは苦手と思いがちである。しかし、子ども達は、非常に早い時期から「視る」能力を持っている。現代の環境や、そこで用いられるさまざまな伝達方法の悪影響で、その能力は否応なしに抑えつけられて、次第に「見る」だけに移行しがちである。

よく「私は、絵がよくわかりません」という人がいるが、それは概念的な知識、理解のことを指していて、自分なりの感じ方や気持ちについて表現しているのではなく、またただ見るだけになっている場合が多いのではなからうか。

鑑賞教育の視る力を育て、視る楽しさを味わうことが、すべての子どもたちに必要、不可欠なことではないかと考える。確かな見方や味わい方ができるようにすることによって、大人になっても、自分の感じ方を自信をもって表現で

きる人になってもらいたいものである。

本論では、どのようなねらいで、どのように子どもに働きかけていくことが造形的な環境や鑑賞教育の在り方を見直していくことになるかを考えながら、実践による研究方法によって具体的に追求していきたい。

Ⅰ 図面工作科における鑑賞領域

1 新学習指導要領における鑑賞

新学習指導要領の目標「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な創造活動の基礎的な能力を育てるとともに表現の喜びを味わわせ、豊かな情操を養う」を受けて、内容は「表現」と「鑑賞」の2領域に分けられていることは前回と同様であるが、学年の目標が、低・中・高の三つの学年にまとめて示されたことは、今回の改訂からである。(表1)*2)これは、各学年の児童の実態等に応じた充実を図るようにするために大綱化、弾力化を進めた結果である。しかし、具体的な能力や感覚等の発達を大まかに区切って示す場合、特に発達過程に対応することがあまいになることがある。

そこで、内容については、発達過程に対応する観点から学年ごとに示してある。ただ、それでも学校の実態や児童の創造活動の広がりを考えて、弾力的な指導が行なわれることが望まれる。

全体としては表現製作について学習を深めていくような指導が低学年で貫かれ、中学年では友人の表現の中にその工夫のあとやよさを認め合い、異なった個性の表現の中にあるそれぞれのよさ、美しさを気付かせていこうとしており、高学年では外国の美術作品も積極的に取り上げ、文化の違いと表現の特性に気付き、分かり合う指導によって、それぞれの文化のよさを味わい、国際理解が深まることを期待している。

低・中・高学年での鑑賞指導は具体的に何をどのように扱えばよいかを取り上げてみると、次の様である。

(1) 低学年（1・2年）

低学年の児童は描いたり、つくったりする表現製作のための直接的な活動は好むが、ゆっく

りと他の人の作品をながめて楽しむということが少ない。

このような発達の特性から考えて、鑑賞の指

表1 新学習指導要領における鑑賞の内容のまとめ

領域 内容の柱	鑑 賞					
	作品を見る			鑑賞する		
学年	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
内容	(1) かいたり、つくったりしたものを見ることに興味をもつようにする。	(1) かいたり、つくったりしたものを見ることに興味をもつようにする。	(1) 作品を見ることに興味をもつことができるようにする。	(1) 作品を見ることに興味をもつことができるようにする。	(1) 造形作品を鑑賞し、それらに親しむことができるようにする。	(1) 造形作品を鑑賞し、それらに親しむことができるようにする。
内容の 小項目	ア 自分や友人の作品などについて、表したかった気持ちを話したり、友人の話を聞いたりしながら見ること。	ア 自分や友人の作品について、表したかった気持ちや感じたことを話し合いながら見ること。	ア 友人の作品を、表したかったことや表し方などに関心をもって見ること。	ア 友人の作品や親しみのある美術作品をよさや美しさ、表し方などに関心をもって見ること。	ア 我が国の親しみのある美術作品などのよさや美しさなどに関心をもって鑑賞すること。	ア 我が国及び諸外国の親しみのある美術作品などのよさや美しさなどに関心をもって鑑賞すること。
			イ 表現しようとすることに関連のある身近な造形品のよさや面白さなどに関心をもって見ること。	イ 表現しようとすることに関連のある身近な造形品のよさや面白さなどに関心をもって見ること。	イ 友人の作品を鑑賞し、表現の意図や特徴に関心をもつとともに、そのよさなどを分かり合うこと。	イ 友人の作品を鑑賞し、表現の意図や特徴が分かるとともに、そのよさなどを分かり合うこと。

導はあまり意味のないもののように感じられるが、進んで表現することが行なわれるようになるためには、友人の作品や日常的な諸事象に深く心を奪われたり、身の回りの形や色に関心をもってることが是非とも大切なことである。表現の裏に隠された深い感動がなければ、できあがった作品も生気のないものになってしまう。

しかし、他の人のつくった作品をながめ、よく見て、深く感動するというような活動を一律に望むことはできないので、細かい鑑賞の方法などにはとられずに、自分の作品を大切にし、どのように心をこめて制作したかを思いおこさせ、そのことにより子どもたち自身が友人の作

品も同じように大切に育てることになる。そして他の人の作品にも関心を向けることができるようになることが指導の力点になる。

「友人の作品」というのは当然クラスの友人の作品が主であって、直接作者の話を聞けることが好ましいが、他学級、近隣の学校の児童の作品も場合によっては含まれよう。

(2) 中学年（3・4年）

中学年の鑑賞も基本的には作品をじっくりながめて深く味わうということを要求するよりも、「関心をもつことができるようにする」という程度にとどめておいた方が適切である。そし

てその手掛かりとして、「友人の作品のよさ」や「身近な造形作品の面白さ」に焦点をあてて行うことになる。

鑑賞が細部にわたる分析的なことを要求するのではなく、自由な感じ方を保証しながら、児童が深く豊かな表現への糧を得るような鑑賞をめざすことである。

特に友人の作品についての指導は、どうしても自分のものとの比較においてなされることが多いので、自分の表現に自身を失ってしまったり、表現することを恐れてしまうようになり、他の人の作品の気に入らない部分のみをあげつらうようになっては逆効果である。お互いにそれぞれの作品によいところ、工夫が活かされている部分を発見し合いながら、表現への意欲が高まっていくような指導が望ましい。

材料をもとにした造型活動が大きな比重で項目として立てられたことと合わせて、材料、形、色、組み合わせることに関心が向けられているので、身近な日用品や玩具をこれらの観点から見つめ直していくような指導も必要になってくる。日用品などでは、触った感じ、重さの感じ、大きさ、使ってみたときの感じなど、いろいろな側面があるので、それらについても関心をもたせるような指導が必要である。

(3) 高学年（5・6年）

中学年までの「関心をもつ」という表記から、「鑑賞」するという積極的な扱いに変わっているのが高学年の特徴である。

高学年になるとかなり客観的に、ゆったりと他の人の作品をながめることができるようになる。また、多くの作品についても自分なりの判断規準が芽生え、簡単な批判もできるようになる。また、好きな作品傾向、好きな表し方等が意識されてくるようになるので、一步踏み込んで「鑑賞」としている。

鑑賞は、関心をもつ段階から一步進んで自分なりの造形的体験の積み重ねによって得た尺度で、作品の質を見取っていく活動である。しか

しながら美術作品から得た深い感動が、自分のイメージとなって作品に結実していくとは限らない。多くの場合そのときに得た感動は、今までの自分の美的判断の枠を大きくゆり動かし、潜在的なエネルギーとなって、より洗練された判断規準となったり、時を経てから表現へと結びつくことになる。

高学年では友人の作品の中にそれぞれのよさを認め合っていくことのほかに、我が国及び諸外国の美術品が取り上げられることになるが、様式とか動向について美術史をそのまま扱うことではない。このような指導は作品を疎遠なものとし、発達段階を忘れた高度な扱いとなるおそれがある。この意味で「親しみのある美術作品」としたのである。時代や地域を軸として、平板もしくは羅列的な作品を解説によって知的理解に偏った指導になってしまうこと、作品から受け取るべき、深く、新鮮な感動が希薄化してしまうからである。

児童にとって「親しみのある美術作品」とは、郷土に伝わる作品であったり、しばしば目にすることができる著名な作品であったり、表現の方法や表現されている内容が分かりやすいものことである。したがって地域で実物に触れることができるような場合には機会を選んで、積極的にこれらを体験させる必要がある。また、地域に伝わる工芸品のような場合には、作家に会って話を聞くという時間も、児童に新たな表現製作の意欲を生み出させることにつながってくる。

どの作品にもその背景には文化、時代、作家の個性があり、工芸品などのような場合にはそれぞれの地方、それぞれの時代の生活様式があり、身近なところに材料があったということを感じさせることも高学年の鑑賞では大切なことである。したがって、それぞれの作品を比較してすることによって、造形的感性の異なっている部分を受け止めたり、新しい表現の領域が広がるような指導もすべきである。自分の表現、自国の表現だけにとらわれるのではなく、外国

表2 教科書における美術作品分類表 I
平成元年度

出版社	学年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
開隆堂			葛飾北斎 「富嶽三十六景」 安藤広重 「東海道五十三次」 ルノワール(フランス) 「テラスにて」	スーラー(フランス) 「ラ・グランドジャト 島の日曜日の午後」	ボナール(フランス)「いなかの食堂」 ロダン(フランス)「考える人」 シャガール(ロシア)「村にかかる虹」 ブルーゲル(フランドル)「農民の結婚式」 横山大観「夜桜図」	中西利雄「イタリアの春」 マルケ(フランス)「雨の海岸通り」 ゴッホ(オランダ)「アルルのはね橋」 川合玉堂「彩雨」 マグリット(ベルギー)「ピレネー山脈のしろ」 レジェ(フランス)「レジェ美術館の陶壁画」 ブールデル(フランス) 「制作するロダン」「弓を引くヘラクレス」
東京書籍				クリスト(アメリカ) 「ピンクの島」	マグリット(ベルギー)「無知のような精」	パルミジアーノ(イタリア) 「丸みのある鏡に写った自画像」 エッシャー(オランダ)「空と水」木版画 ミロ(スペイン)「油絵の上にひもをはりつけた作品」 〈自画像〉 レオナルド・ダ・ビンチ、ゴヤ、セザンヌ、ダリ、ルノワール、ルソー、ゴーギャン、ゴッホ、マチス、ピカソ
日本文教出版	俵屋宗達 「りゅうの元」 「ふうじん・らいじん」	ガウディ(スペイン) 「聖家族教会」 「公園の塔」	ブルーゲル (フランドル) 「農民の結婚式」 ゼネラリッチ (ユーゴスラビア) 「木を切る人たち」 エッシャー(オランダ) 「空と水」 シャトル寺院 (フランス) 「スタンドグラス・ バラ窓」 木村勝 「アロック・デイト」	バザルリー(ハンガリー)「作品」 マグリット(ベルギー)「大家族」 ゴッホ(オランダ)「農夫」 デューラー(ドイツ)「野うさぎ」 伊藤若冲「にわとり」 シャガール(ロシア)「私と村」 ブール(フランス)「大熊とつなわりの少女」 岸田劉生「麗子像」 尾形光琳「かきつばた」 東洲斎写楽「大谷鬼次の奴江戸兵衛」 興福寺「阿修羅立像」 新薬師寺「神将像」	円空「明福寺の薬師如来」 ゴッホ(オランダ)「ラ・クローのかり入れ」 葛飾北斎「富嶽三十六号・神奈川沖浪裏」 小野竹齋「奥の細道句抄絵」 横山大観「夜桜」	
光村図書		ラブジン (ユーゴスラビア) 「私の世界」 岡村好文「ウシ」	ミロ(スペイン) 「人と鳥」 シャガール(ロシア) 「アコーディオンひき」 鳥羽僧正「鳥獣戯画」	横山大観「霊峰十趣・秋」 マグリット(ベルギー)「第三次元」 ルソー(フランス)「林の中の公園」 葛飾北斎「凱風快晴」 梅原龍三郎「晴れゆく」 林武「赤富士」	ピカソ(スペイン)「花飾りをつけたマリー・テレーズ」 「自画像」「はと」「顔、牧神の頭」「子羊をかぶる女の胸像」 「パロマの肖像」「画家の娘」 ゴッホ(オランダ)「かわくち」 クレー(スイス)「黄色い鳥のいる風景」 トガ(フランス)「ダンスをする人」	
現代美術社	ピカソ(スペイン) 「ろばに乗ったポール」 つば(エジプト)	佐藤忠良(日本) 「腰かけている人」 ワイエス(アメリカ) 「犬」 えび原あきのすけ 「曲馬」 木像(エジプト) 「そなえものを運ぶ女」 はにわ 「ことをひく男」 陶器 「手を組んだ女」	ゴッホ(オランダ) 「郵便配達人ルーラン」 素焼(エジプト) 「ビールを作る人」	マネ(フランス) 「少年と犬」 ピカソ(スペイン) 「クロードとパロマ」 「少年ポール」 デューラー(ドイツ) 「アルコの風景」「うさぎ」 ワイエス(アメリカ) 「花・やまぼうし」 奥村工牛「ベルシャねこ」 神田日勝「馬」 山本正道 「ニューヨークの王様」	ルソー(フランス) 「飛行船を飛ぶ風景」 「眠れるジプシー女」 マネ(フランス) 「ガラスの花びんにさした花」 ルドン(フランス)「花と花びん」 ゴッホ(オランダ)「くつ」 ダリ(スペイン)「パンかご」 マンズー(イタリア)「マリアの花」 ブールデン(フランス) 「少年ミッシェル」 シャルダン(フランス) 「こまを回す少年」 ピカソ(スペイン) 「母子像」「16歳の自画像」 ダリ(スペイン)「つきまとう記憶」 前田青邨「77歳の自画像・白頭」 レオナルド・ダ・ビンチ(イタリア) 「人力飛行機」「木製の自転車」	

表3 教科書における美術作品書分類表II
平成6年度

出版社	学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年
開隆堂			ベルナル＝シュネーズ (フランス)「おすもうさん」 「太陽の顔」(メキシコ) 「豊作を祝う仮面」 (パプアニューギニア) 「さよきちめんとのろまめん」 「なまはげ」「神様の仮面」 (パプアニューギニア) 「お守りの仮面」(ミクロネシア) ピカソ(スペイン) 「お皿にかいた絵」 「お祝いなどに使う仮面」 (ペルー) 「劇に使う仮面」(北朝鮮) 「踊りに使う仮面」 (コートジボアール)	葛飾北斎「神奈川沖浪裏」 エディ・大津 「木のかげにかくれ ているのは？」 「岩にかかれた絵」 (ジンバブエ) (アルジェリア) 「つばの絵」(ペルー) 「壁画」(エジプト) 「虎塚装飾古墳の壁画」 「土器にかかれた絵」(アメリカ) 「建物の床のモザイク画」 (ヨルダン) 「羽窟の岩にかかれた絵」 (フランス・ラスコー)	稲垣知雄「歩くねこ」 関野準一郎 「ミネアポリスの小学校」 棟方志功「花矢の柵」 安藤広重「さばとかに」 ライリー(イギリス) 「大滝III」 篠原勝伝 「こぼれたみつとあり」	前田青愷「徒然草」 速水御舟「隠岐の海」 山口蓬春「秋」 加山又造「海の道」 マグリント(ベルギー) 「最後の叫び」 歌川芳藤 「5人頭で10人に見える」 バザルリ(ハンガリー) 「作品」 竹内栖鳳「うさぎ」 鳥羽僧正「鳥獣戯曲」	ピカソ(スペイン)「すわる女の人の人」 「アンティープの夜の魚とり」 「アルルカンにふんしたポール」 「生きるよろこび」 ローランサン(フランス) 「ギターを持つおとめ」 エッシャー(オランダ)「空と早」 ヘンリー・ムア(イギリス)「家族」 品川工(日本)「フォークのモビール」 マイヨール(フランス)「とげをぬく人」 ミロ(スペイン)「人物」 福田繁雄「ボンジュールマドモア地」 モネ(フランス)「ルーアン大聖堂」4枚 写楽「大谷鬼次の奴江戸兵衛」 薬師寺東塔「水煙」
東京書籍			クレー(スイス) 「ベネチアの小さい宝」	藤城青治 「森の音楽会」 ブリュゲル (フランドル) 「大きい魚は小さい 魚を食べる」	箱根彫刻の森美術館 「ステンドグラス・光のシン フォニー」 ミロ(スペイン)「月の鳥」 銅鐸「鹿をとらえた男の絵」 土偶 「ハートの顔をした土でつ くった人形土偶」 「儀式のときに使うナイフ」 (ペルー)	はにわ(日本・古墳時代) 「畑にゴッホの絵」(アメリカ) 古賀春江「風景」 「ビルの壁面の窓のだまし絵」 (カナダ) 歌川広重 「東海道五十三次・日本橋」 岸田劉生「切り通しの写生」 池田遥邨「雨の大阪」 雲愛 嘔「夏の海」 米谷清和「暮れてゆく街」 マルチンボルド(イタリア) エッシャー(オランダ) ヴァザルリ(ハンガリー) 「方形による球体」	ポロック(アメリカ)「収斂」 ピカソ(スペイン)「父ホセの肖像画」 「曲芸師の一家」 「びん、グラス、バイオリン」「母と子」 「顔」「泣く女」「ゲルニカ」「やぎ」「昼寝」 (自画像) レオナルド・ダ・ビンチ(イタリア) ルソー(フランス)ゴッホ(オランダ) ヴィヤール(フランス) マチス(フランス)ピカソ(スペイン) シャガール(フランス) ロックウエル(アメリカ)河野通勢 ベーコン(イギリス)山下清 マグリット(ベルギー)「大家族」 ガウディ(スペイン)「聖家族教会」
日本文教出版	俵屋宗達 「雷神」		ハレマン＝ラリベルテ (アメリカ) 「バンナー」	アンナMR・モーゼス (アメリカ) 「農場のひっこし」 丸本スマ「かきもぎ」 カウディ(スペイン) 「聖家族教会」 「先祖をまつるお面」 (パプアニューギニア) 「カーニバルのお面」 (ユーゴスラビア) 「儀式のお面」 (パヌアリ) 「お福の面」 「三春はりこ」 「凧」3点	葛飾北斎 「富嶽三十六景：神奈川沖浪裏」 渡辺華山「寺子屋」 ボライウォーロ(イタリア)「横顔の女」 東洲斎写楽「大谷鬼次の奴江戸兵衛」 岸田劉生「麗子像」 エッシャー(オランダ)「滝」「変身」 尾形光琳「紅白梅図」 横山大観「夜桜」 ホイットスラー(イギリス)「あべこべの顔」 新薬師寺「神将像」 東大寺法華堂「月光菩薩像」 「みろく菩薩像」 広隆寺 「夜警」(オランダ)レンブラント ブリュゲル(フランドル)「雪中の狩人」	クレー(スイス)「黄色い鳥のいる風景」 サン＝フェール(フランス) 「ストラビンスキーの泉」 ルソー(フランス)「カーニバルの夕べ」 マネ(フランス)「笛をふく少年」 ゴッホ(オランダ)「タンギーおじさん」 「日本趣味・雨の橋」 歌川広重「二ひきのほし魚」 「大はしあたけの夕立」 クロー(デンマーク) 「広重の絵をもとにした花びん」 ミロ(スペイン) 「アメリカの公園・人と鳥たち」 シャトル大聖堂(フランス) 「ステンドグラス」	
現代美術社	ブロンズ像 (西アジア) 「おつきの人」	ブロンズ像(西アジア) 「おじか」	佐藤忠良「男の児」 彫像(中国) 「すわっている女子」 大理石像(ギリシア) 「勝利の女神」	陶磁器(中国・唐) 「女の人」	モディリアーニ(イタリア) 「小さな農夫」 セザンヌ(フランス) 「赤いチョッキの少年」 渡辺学「加工場の夜」 ブリュゲル(フランドル) 「子どもの遊び」 ブリュゲル(スペイン)「本」 ブリュゲル(イタリア)「壁画」 木彫(エジプト)「村長の像」	有元利夫 「私にとってのフランチェスカ」 3点 ミレー(フランス)「たんぼぼ」 ワイエス(アメリカ)「五月祭」 スーラ(フランス) 「グラント・ジャット島の 日曜日の午後」 レンブラント(オランダ)「母の像」 ピカソ(スペイン)「16歳の自画像」 藤島武二「耕天到」 興福寺「阿修羅像」	

の作品に触れることによって、それぞれの良さ、美しさを発見したとき、美術作品を通して異なる文化への理解と親しみが生まれてくることになる。

もう一つの大切な点としては、作品は文化財として、多くの人々が共有する大切な財産なのだという事に気付かせることである。すぐれた作品は、作者だけでなく、多くのひとが感動を分かち会えるものである。そしてこれらの美術作品は現在の自分達だけでなく、未来の人々のためにも守り、伝えていかなければならない財産であることを学ばせることが必要である。特に建造物などの場合には、大切に扱わなければならない。

2 教科書における鑑賞教材

それでは、新指導要領をうけて各出版社の教科書はどのように取り上げているのであろうか。

主に美術作品をどのように取り扱っているかを中心に、出版社5社（開隆堂、東京書籍、日文、光村図書、現代美術社）を対象に調査し、

分類表にまとめてみた。（表2）

ただし、平成3年度から光村図書はなくなっているのので4社になっている。（表3）



よく見て、写生する
 写生は、自然に親しむことで、とてもすばく、自然の美しさに親しむと、心をやしなうことができる。
 写生がいいか、わるいか、などは言えない。美しいものに出会うと、そのまま見ることができない気持ちになるので、つい写生しておくことになる。美しいものに対しては、だれでも羨しうるはたかぬが、いかならう。
 羨しうるが、それだけですべてがわかってしまったわけではない。だれでも自然、樹は根、梅は梅を知っている。説明はいらないが、しかし、その本質を知っているわけではない。よく見て、写生する。はじめて、美しいものの本質を知ることができる。
 これは、上のアケビの花を写生した南風。光村図書のこぼれである。
 風のことばである。

図1 堅山南風のことば（現美6年教科書）



写真1 自分を見つめて（東書6年教科書）

移行期の平成元年と、平成6年度を対比してみると、平成元年にはどの教科書も、4年生以上から、いろいろな作品が載せられていることが分かる。日文と現代美術社においては、2年生から宗達やピカソを扱っていたり、開隆堂と光村図書は、3年生から対象に美術作品を取り扱っている。東京書籍においては、5、6年生だけを対象としている。「心をこめて」の単元で、自分を見つめて自画像を描く題材において、11点の美術作品を載せている。これは、現在の平成6年度においても同様に扱われている。

また、現代美術社の「絵と心」という単元で、各学年さまざまな美術作品を取り上げ、低学年から絵をみる心を育てようとしている。

この社の教科書では、美術作品が一番多く掲載され、全部で30数点あまり取り上げている。ただし、現行の教科書では、他社と逆に作品数がぐっと減り、低学年からは扱わないで、高学

年のみに掲載を絞っている。

また、取り上げている作家は、移行期にはどの出版社も共通してゴッホを載せているが、現行の教科書は、ゴッホの取り扱いが減少している。その他ピカソ、シャガール、マグリットなどもよく取り扱われている作家である。特に、現行の教科書は各社それぞれに取り扱いが幅広くなり、ミロ、エッシャー、ブリューゲルなどが登場するようになった。

我が国の美術作品の扱いは、葛飾北斎の「富嶽三十六景」がよく載っている。その他、東洲斎写楽、安藤広重、横山大観などである。

珍しいところでは、日文の仏像を鑑賞の対象に取り上げているところや、現代美術社においては、レオナルド・ダ・ビンチやエジプトの作品を解説して掲載している。

II 図画工作科における 鑑賞指導の実践(1)

—表現と鑑賞を組み合わせさせた活動—

1 「まぼろしの美術館」実践例1

(1) 複製画と模写

私が教育現場で鑑賞教育に取り組み始めた動機は、11年前の夏休みに資料室を片付けていた時、長い間眠っていた廃棄処分の100枚近くの複製画と出会ったことである。当時は、勤務校の児童の実態もつかみきれず、どのような題材を扱っていったらよいか悪戦苦闘していた。その複製画は、少し色あせて、まだまだ使える状態であった。幸いなことに、新しい複製画の資料もしっかり揃っていたので、発見したものはどんな使い方も可能であった。小規模であったので、児童に自分の好きな作品を選ばせても、充分各自に1枚行き渡った。そこで、「名画の模写」に取り組むことにした。

鑑賞する目を育てる方法の一つに模写がある。目で鑑賞すると同時に手を通して心にひびかせることである。そして、児童が自ら描いた名画を学校全体に展示し、学校の美術館をつく

れないかと考えた。

古い歴史のある学校で、壁面という壁面は児童の卒業製作で埋め尽くされ、環境づくりは整っていた。金沢の繁華街の一つの地域でもあり、美術館に近いという立地条件もあって、児童は意外とよく作品を知っていたり、興味をもっているものが多かった。

少ない図工科の授業時数の中で、鑑賞活動をいかに児童の実態に添って、体系的にカリキュラムを設定していくか。その頃、楽しむという観点から、高学年にも造形遊びの授業を組み入れていこうとしていたので、調整が難しかったが、年間のカリキュラムを立て直した。

(2) 授業の構成

鑑賞授業を体系的に編成するために、まず作品との出会いと作品に関する楽しんで理解する場面のバランスを考え構成することに留意した。作品との出会いは授業に入る前に掲示板を使って作品紹介を順番に行っていた。それまで、そのような掲示が校内になかったので、全学年の児童が興味をもって見るが多くなった。

そして、10月から総時数16時間をかけて、「まぼろしの美術館」を実施した。歴史的体系的な理解を楽しく理解できるように、まず「イラスト美術史」という、子供たちの好きなマンガによって、画家のエピソードや作品を紹介したも



写真2 自分の好きな名画を探す —6年—

表4 鑑賞を題材とした実践例

領域	学年	2年	3年	4年	5年	6年
鑑賞と表現を組み合わせた題材		表現題材の前に鑑賞資料を扱う				
		ゴッホ「ひまわり」 ↓ 「大きなひまわりをかこう」	シャガール「彼女の周辺」 ↓ 「空想の夢・自分のまわりに」	ポロックの作品鑑賞 ↓ 「遊んで描こう」 ↓ 「ビー玉ころころ」 ピカソ「泣く女」鑑賞 ↓ 「ピカソをこえよう・二つの顔」 アニメ「アキラの製作ビデオ」鑑賞 ↓ 「アニメ風ステンドグラス」	安藤広重「東海道五十三次」鑑賞 ↓ 「私たちの五十三次(切り絵)」 ↓ 浮世絵「写楽」複製画40点鑑賞 ↓ 「写楽にチャレンジ・浮世絵風」 水墨画「雪舟」鑑賞 ↓ 「窓から見た雪の風景」 鳥羽僧正「鳥獣戯画」鑑賞 ↓ 「絵巻物冒険旅行」 博物館「土器・焼物」鑑賞 ↓ 「焼き物づくり(素焼き粘土)」	くまぼろしの美術館 I 「ルネッサンス～現代イラスト美術史 ダ・ビンチとピカソ等のビデオ」 II 「名画の模写」 複製画100点 III 「浮世絵・切り絵屏風10双」共同製作 IV 「彫刻の首像」鑑賞 ↓ 「自画像(ブロンズ像)」
名画の鑑賞題材		一枚の美術作品を見て鑑賞				
		ルノアール 「ジョーロエをもつ少女」 マネ「笛をふく少年」	元永定正 「ふたつのしろいかたちから」 「みつつのかたちはしろいせん」 「ばあまるびんく」	ミロ「オランダの室内I」 シャガール「3本の蠟燭」 「彼女の周辺」 ワイエス 「クリスチーナの世界」	葛飾北斎「神奈川沖浪裏」 東洲斎写楽 「大谷鬼次の奴江戸兵衛」 ブリューゲル「子どもの遊び」 マグリット「大家族」	ゴヤ「巨人」 ゴッホ「アルルのはね橋」 岸田劉生「切り通しの写生」 ピカソ「ゲルニカ」 県立美術館常設展鑑賞 (ワークシート使用)

のを、30ページほど印刷して配布し、本づくりに取り組み、各自に持たせた。内容も分かりやすかったようで、中を色鉛筆で着色しながら楽しく読んでいた。そして、次に西洋ではルネサンスから始まる近世絵画の大きな流れを現代に至るまでのレオナルド・ダ・ビンチとピカソを中心に扱ったビデオを見せた。チューブ入り油絵具の発明や印象派と浮世絵との出会い等も紹介し、そこでは我が国の浮世絵についても説明を加えた。

参考までにテーマとカリキュラム、及び紹介した主な画家や内容を以下に記しておく。

- ①イラスト美術史を配布する。
自分たちで興味のあるところを読む。
- ②人間が美術を求めて何を描いてきたかをビデオで見る。
 - イタリア・ルネサンス
ラファエロ、レオナルド・ダ・ビンチ
 - 印象派
モネ、マネ、ゴッホ、スーラー、セザンヌ
 - キュビズム
ピカソ、ブラック
 - 現代の作品
デュシャン、シーガル
- ③浮世絵と印象派との出会い
 - 葛飾北斎、安藤広重、喜多川歌麿、東州斎写楽
- ④図工室に美術コーナーをつくる。
児童がグループ単位で図工室の壁面に、テーマ別に作品を展示する。
(児童がつけたコーナー名)
 - ・風景画
ターナー、モネ、セザンヌ、北斎、広重
 - ・人物画
ルノアール、スーラー、写楽、歌麿
 - ・夢の世界
ダリ、マグリット、シャガール、ゴヤ
 - ・形のおもしろい絵
ピカソ、ミロ、カンディンスキー
 - ・写真のような絵

レオナルド、ファン・アイク、ワイエス
・見たことのある絵コーナー

ゴッホ、ミレー、セザンヌ、ピカソ

- ⑤自分の好きな絵を選んで模写しよう。
(水性ニスでコーティング)
- ⑥ダンボールで額縁をつくろう。
(金、銀のスプレー使用)
- ⑦自分の作品を学校に飾ろう。

①～⑦のような流れで「まぼろしの美術館」は、進めた。同じような扱いで2年、3年と同テーマを続けている間に、「名画の模写」の他、子供達の声から生まれた卒業制作の「浮世絵・切り絵屏風」や、自画像のブロンズ像も校内に展示したり等、「まぼろしの美術館」は学校全体を展示スペースとしたダイナミックな活動に膨らんでいった。卒業式に向けてカリキュラムを組むようになったのもねらいに合わせて組み合わせを効果的に図った点にある。

その後、1985年以降に鑑賞教育が少しずつ取り上げられるようになってきた。しかし、具体的な実践例はほとんどみられず、わずかなお茶の水女子大学付属小学校の古市憲一^{*)3)}の実践例や岩本康裕「分析批判による名画鑑賞の授業^{*)4)}」などを参考に、次第に全学年にわたってのカリキュラムづくりが完成してきたのである。(表4)

2 創造的鑑賞活動

「美術教育」は、ものの本質(自分を知る、美しさを見極める)を見る力を育てるところに意義がある。そのためには、表現活動だけでなく、鑑賞活動も重要な存在である。表現と鑑賞は、その学習活動によって体得したものを自己表出する意味では、共に創造活動といえよう。表現と鑑賞を共に創造活動ととらえ、身近な環境の中における表現と鑑賞を組み合わせた実践を通して一端を述べてみたい。

- (1) 東海道五十三次 5年 実践例2
一切り絵で表わすー

この題材は、子供が自ら興味をもつ主体的な姿勢を発達段階に応じて育てようという意図をもっている。ここに取り上げた「東海道五十三次」は、身近な雑誌やコマーシャルなどでもみられ、児童は興味をもっていった様である。また、これが版画であることに興味をもち、我が国の美術作品のすばらしさに驚きと感動を示していた。五十三次というので、どんな場面があるか画集で1枚ずつ興味深く見ていった。また広重と対比しながら、「北斎の富嶽三十六景」についても鑑賞と説明を加えた。

そして、図工室の掲示板に全部の場面をコピーし、順に掲示していった。児童はどんな景色が描かれているのか、自分の好きな場面はどれか。新鮮な目で1枚々々に見入っていた。鑑賞カードももたせ、自分の好きな場面を分担して模写に入った。そして、それらを切り絵で表現させることにした。

なぜ、切り絵で表現させたかは、浮世絵版木の構図のすばらしさや、線の美しさなど、浮世絵を鑑賞する上で大切な視点に気付かせやすいからである。実践したのは5年生であったのと、時間的な関係から、白地に黒の切り絵で仕上げたが、発展して多色にするとさらに、浮世絵に近付けることができると思う。木版画による表現ができれば最も望ましいであろうが、小学校の発達段階では技術的に難かしいので、児童にとって表現しやすい切り絵による表現を考えたのである。子どもたちは、カッターで、ていねいに線を切り描いていく作業に夢中になっていた。どの児童も自分に合った作業と表現ができ、大変満足していたようである。総時数8時間、早く完成した児童も多く、さらに発展して北斎の「富嶽三十六景」に、挑戦していた。完成した作品は、教室に場面の順に並べて掲示し、「私たちの五十三次」と題した。それらを鑑賞し、「あの人物はもっと違うように表現できるようだ。」「あの木の表わし方はとてもいいね。」とお互いに感想を話し合っていた。

○準備

広重版画集、鑑賞カード、スケッチブック、カーボン紙、白・黒画用紙(八ツ切)、カッター、スプレーのり

○学習のながれ

- ・教科書にある「風景の中の人々を表わした北斎と広重」を鑑賞する。
- ・浮世絵版木の説明と、北斎と広重の説明も加える。
- ・「東海道五十三次」の全場面を鑑賞し、自分の好きな場面を話し合う。
- ・鑑賞カードをもたせ、自分の好きな場面を選び、感想を書く。
- ・自分の選んだ場面をスケッチし、カーボン紙で黒の画用紙に転写する。
- ・白と黒のバランスと線のつながりを考えながら、カッターで切り取っていく。
- ・完成したら、スプレーのりをかけ、白画用紙の台紙に貼る。
- ・完成した作品に感想を書く。
- ・「私たちの五十三次」と題して掲示し、鑑賞会を行う。

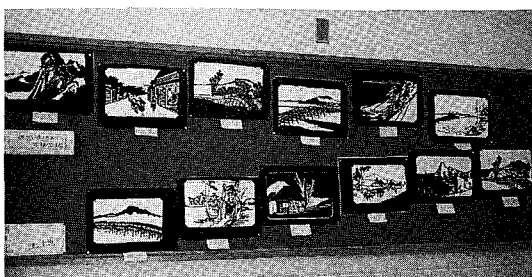


写真3 「私たちの五十三次」

(2) 博物館探検隊 5年 実践例3 —焼物の形と文様—

この題材の実践校は、石川県立博物館・美術館までは、歩いていけるという距離ではなく、鑑賞教育のために活用するという点では、バス等を利用しなければならず、時間的にも児童にかかる費用の負担面を考えても、活用が困難である。そのような学校は、金沢でも多く、そのため活用したくてもなかなか出来ないといった

実態であろう。これからの美術館教育も叫ばれている今日、博物館・美術館において学校の生徒を対象とした送迎バス等をもつなど具体的な方法がとられないと鑑賞教育のみを唱えていても、実際に授業としては実現できないのが現実である。しかし、今回はある所からバスを貸して頂いて、児童に負担のかからないよう実践してみた。

博物館・美術館での催しものは、団体鑑賞と名がついているように、それには、長所と短所が見られる。大勢の友達同士で一斉に入場する際、遠足に行った時のように、うきうきと興奮を覚えることは長所であり、また、鑑賞と違った興味的话题に走ってしまうという点では、短所といえる。また、長い列を組んで会場をめぐることは、児童の個々の意志が無視されて、自分の興味にそって鑑賞できない。そのため、美術館側や、一般の観覧者から敬遠されることもある。その中で、作品に関する印象が薄い結果に終わりがちなことは当然であろう。

欧米の学校が美術館を利用する場合、小グループでディスカッションしたり、説明を聞いたりしており、時間帯も学校の生徒対象に特別に取られている例がある。日本では、美術館が成人を対象にして作られているので、児童にとっては美術館に対するイメージは、おもしろくない、行きにくい等否定的な面が多い。

そこで、現在の美術館において少しでも児童が興味を持ち、主体的に鑑賞できるような実践を考えてみた。

この実践は、博物館と美術館の両方を鑑賞し、一度に困難を避ける為、半々に交替してそれぞれを訪れるようにし、博物館では、縄文土器から明治までの焼物を小グループで、自分達で探検しながら鑑賞し、美術館では、常設展をカードを持ちながら、個人で鑑賞させるようにした。どちらも申請書を出すことにより、観覧料免除の許可を受けることができた。

その後、博物館における土器や焼物の鑑賞を生かして、学校に戻って自分達の焼物づくりへ

と表現の活動に結びつけた。

以下は、学習の流れと鑑賞カードを参考に載せてみた。



写真4 5年 一博物館にて一

●単元構成（総時数3時限）

第一次（1時限）…本時

さまざまな時代の焼物の形と模様を鑑賞することによって、焼物の時代の流れを知り、焼物を鑑賞する楽しさを味わう。

第二次（2時限）

ひもづくりで、自分の思いをもった焼物をつくる。

●授業の流れ

学習活動	時	児童の意識の流れ	教師の働きかけ
1. 本時のめあてを把握する	5	<ul style="list-style-type: none"> 〈探検隊になって焼物を調べてみよう〉 ・社会で習った土器を知っているよ ・縄文式土器はおもしろい形をしている ・どんなものがあるのかな 	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館探検隊になって焼物を探してくるということ で、本時の意欲づけとする ・探検カードを渡し、それをもとに探検する。
2. 素材提示 4つのポイントで、それぞれの時代の焼物を鑑賞する	30	<ul style="list-style-type: none"> 〈4つのポイントを通していろいろ見つけてみよう！〉 ① Aポイント 縄文時代の土器 ・底が細い ・立体感が出ていて好きだ ・ぐにゃぐにゃした形がおもしろい ・本物が見れて、うれし ② Bポイント 弥生時代の土器 ・底がどっしりしている ・どんなものに使われていたのだろう ・形がまるくて、きれいな模様で、細かい 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品への単なる知識理解に流れないで、まず好きかどうか、その子なりの感じ方で作品に接することの大切さを押さえる。 ・作品の好みについて、互いに意識し合うきっかけとしたい。 ・どんなものに使われていたかを想像させる。 ・形や模様のおもしろさをじっくりながめ、各時代の姿容をつかむ。
3. 問題の追求 各ポイントで説明を聞き、感じたことを話し合う			

4. まとめ	<p>③ Cポイント 鎌倉～室町時代 珠洲焼</p> <ul style="list-style-type: none"> ・とても大きい ・重い感じがする ・線が横目でひかれています ・たくさんつくられていた 	
	<p>④ Dポイント 江戸～明治時代</p> <ul style="list-style-type: none"> ・形がととのっている ・もようがいろいろある ・色がついていてきれいな ・いろいろな形があるよ 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品への思いを鑑賞カードに書き加えていき、児童全員がその思いをつかみ、その子なりに変容を気づかせる。
	<p>10 その昔、人間は自分で使うものは自分でつくりました。やがて、自分でつくったよいものと、他の人がつくったよいものを交換するようになりました。じょうぶで、使いやすく、みんながほしがるように色や形にしようと遠い昔から多くの失敗や工夫をくりかえしながら現代にたどりついたのです。</p> <p>〈自分でも焼物をつくってみよう〉</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全体で焼物の時代の流れを話し合うことで、自分のうかんだ思いを確認し、各自の感性を高めることにつなげる。 ・焼物をつくって表現するということで既習を生かす

子がやってきた経験である。しかし、高学年になるにしたがって、自由でこだわりのないその思いを封じ込めがちになる。

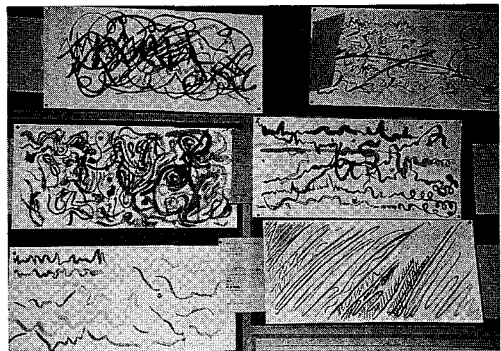
人として本能的な欲求を満たすことができ、原点に戻ることでできる図画工作の時間。高学年の知的、精神的欲求に応じた授業とはどのようなものか。そのためには、知的水準が上がるほど感性や本能を忘れがちになっている彼等にできる限りの知性と感性の調和、もしくは感性を覚醒することである。そのことにより一人一人が真の姿に気づき、心を高揚させ、想像豊かな表現ができるようになるであろう。

心にひびいたものを、表出する一人一人のあらゆる動作、言葉、素性、一本の線、すべてがその子の個性である。自分を表現したいという欲求はどんな児童ももっている。抽象的な形体が得意な者、具象的な能力に秀でている者、いずれもが、教師に認められる事により、次へ進むことができる。また、一斉に描き、絵をみる仲間がいて、それぞれが認め合えるからこそ感動が何倍にも膨れ上がり、さらに描こうとする意欲が湧いてくる。体や心の中から持っているものをすべて出し切るというエネルギーが湧いてくるような場を多く設定することが大切でないかと考える。

(4) 音楽を聞いて描く 6年 実践例4
一心の中を描く一

鑑賞の指導について、これまで美術作品を扱った実践例を述べてきたが、この題材は音楽の鑑賞をもとに、それを色や形を用いて表現させる意図の実践である。ジャズ、クラシック、ニューミュージック等、その時々にあわせて音楽にのって思うがままに線をひく。そうすると潜在意識や封じ込められていた思いが一気に吹き出し、心が軽くなる。誰もが描けることを楽しみに新しい自分との出会いができることで喜びを味わえる。描きたいものが描ける。何かしら描きたくて、創れそうな気がしてくる。夢中になれる。うまくいきそうだ。次の表現が楽しみ。そのほころんだ雰囲気教室全体が包まれると教師も子どもも創造する喜びを味わうことができる。

人は生まれながらにして創造する能力を持っている。幼児の始画、スクリブルに始まり、いろいろな体験を通して何かを感じとって表わそうとする。そのような本能的な動作はすべての



●単元構成 (総時数 2 時限)

第一次 (1 時限) …本時

「ミステリアス・バリケーズ」を聞き、曲に合わせて感じたままに線を描写する。

第二次（1時限）

ベートーベン「月光」を聞き、感じた情景を描写する。

●授業の流れ

学習事項	時	児童の意識の流れ	教師の働きかけ
1. 素材提示	3	曲からリズムを感じとろう ・とても 楽しい ・体が動いてくる ・リズムにあわせてみたい	・目を閉じて曲に感入る。 (おだやかな心・真っ白な心で)
2. 表現活動①	5	感じた色をパレットに出そう ・光を感じた黄色、やまぶきを出してみよう ・やわらかい音に白の混ぜ色もつくろう	・感じた色を5～6色出させる。
3. 表現活動②	20	〈感じたリズムを線で描こう〉 ・いきよいよくかこう ・右と左の色を違わせよう ・ここは、はっきり濃くぬろう ・やわらかくぬると感じが出るよ	◎曲をもう一度聞きながら、それぞれの思いを線に表す ・うすくぬる部分と、濃くぬる部分と、変化のある着彩のし方を工夫させる。
4. 鑑賞	10	曲の感じが表われている作品を選んでみよう	・観点を3つに絞り、友達の鑑賞カードに○シールを貼らせる。
5. まとめ	5	絵を描くことは楽しい。 どんな線にもその人の個性がある。	①好きだ、すてきだ ②曲が聞こえそうな線 ③色の美しさ
6. 次時の予告	2	次はクラシックを描いてみよう	